

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。心から歓迎いたします。

ご父母、ご家族、保護者の皆さまにおかれましては、誠におめでとうございます。今日、こうして来賓の皆様方とともに、新入生の皆さんをお祝いすることができることを、本当に嬉しく思っています。

日本福祉大学は 1953 年、今から 72 年前に鈴木修学先生により建学されました。鈴木先生は建学の精神のなかで、「この悩める時代の苦難に身をもって当たり、社会の革新と進歩のために挺身する志の人を、この大学を中心として輩出させたい」と述べられています。第二次世界大戦が終わり、混乱した社会のなかで、これからの未来をつくる志のある人財を輩出しようと本学をつくられました。

ただあれから 80 年経った今の日本は、そして世界は幸せになったと言えるでしょうか。孤独や孤立、格差や分断が進行し、自己第一主義のもと多様性や包摂性が脅かされ、いまだ戦争が終わる光が見えません。

その意味で私たちは、今現在も悩める時代に生きているのです。日本福祉大学は、いつの時代もその苦難に向き合い、挺身できる志の人を育んできました。全国各地で 10 万人を超える同窓生が活躍していることが誇りです。

鈴木修学先生は、宗教家であり、社会事業家でもありました。当時は不治の病として隔離差別されていたハンセン病の患者、戦争で親を亡くした戦争孤児、まだ制度もない時代に障害のある人たちと過ごすなかで、これからの日本に福祉が必要だと考えたのです。

ただそれは困った人たちだけを救おうとしたものではありません。鈴木先生は、世の中で一番苦勞している人たちに寄り添い、彼らから人間の尊厳を学び、すべての人たちが幸せに生きていけるようにすること、そのために万人の福祉が必要だと考えたのです。

みなさんは高校で「誰一人取り残さない SDGs」を学んできたと思います。日本福祉大学は 70 年前からこのことに取り組んできたのです。

日本福祉大学は、福祉を平仮名で「ふつうのくらしのしあわせ」と表現しています。ふつうのくらしのしあわせ、この当たり前のことをすべての人が享受できる状態、それをウェルビーイングといいます。

1985 年 1 月 28 日、長野県の犀川ダム湖でバス事故が起きました。大学の授業でスキー場に向かって 22 名の学生と教員 1 名、バス乗務員 2 名、25 名が亡くなりました。美浜キャンパスの友愛の丘には慰霊碑があります。ぜひ一度、訪ねてみてください。そこには穏やかで優しい風が吹いています。私はそこに立つたびに、「ふくし」の尊さと有難さを教わります。日本福祉大学が「ふくし」を大切にするのは、志半ばで亡くなった先輩たちの想いを今もしっかりと継承しているからです。

「ふつうのくらしのしあわせ」が実感できるためには、自分や家族が健康であること。困ったときに相談できる人がいること。自分の役割や居場所があること。でもそれは自分ひとりだけでつくられるものではありません。多くの人たちと一緒にあって、協働していくこと、他者と共に生きていくことで、「ふくし」は実現していくのです。

日本福祉大学はそれぞれの専門分野の学びを基礎にして、学部や学問領域の枠を越えた、様々な学びを大切にしています。学生時代、いろいろなフィールドにも足を運んでください。今まで出会ったことのない人たちと対話をしてみてください。勇気を出して新しい世界にふれてみる。これまで縛られてきた学歴や偏差値といったものさしでは測れない世界があります。大人が作り出してきた既成の枠組みを疑い、新しい「ふくし」の価値観を自分の体験を通して見つけてください。

そんな充実した学部の4年間、あるいは大学院の2年間を過ごせるように、私たち教職員は、全力で皆さんを応援します。何か困ったときには、遠慮なく「助けて」と言ってください。皆さんが安心して、助けてと言えるキャンパスにしていきたいと考えています。

そして将来、皆さんがこの日本福祉大学で学んだことを誇りにして、社会に出ていくこと。それは皆さん自身の夢や希望を叶えるだけでなく、そのことがこれからの日本の社会をよりよくしていくことにつながる、鈴木修学先生はそう信じて、私たちにその精神を託されたのだと思います。

入学式にあたり、そのことを皆さんに祝辞としてお伝えし、こうして、皆さんと出会えたことに感謝して、お祝いの言葉といたします。

あらためて、ご入学、本当におめでとうございます。

2025年4月1日

日本福祉大学 学長 原田正樹